

人間のニーズ・貧困概念の変遷

斎藤 千宏

<構成>

はじめに

第1節 セン以前のニーズ論

第2節 センの貧困概念

第3節 セン理論の前進

第4節 操作化に向けて～人間開発指標（HDI）の革新性と限界

むすびにかえて

はじめに

一人当たり国内総生産（GDP）指標だけで、国民福祉の発展状況を測ることは適切でないという認識は、先進工業国において公害問題が噴出した1970年代にすでに出現している。そしてこの指標を補完したり代替するような指標の開発が多くの機関で試みられてきた。例えば当時、日本政府の経済企画庁が発表したNNW（純国民福祉指標）はその一つである。近年では、1990年に国連開発計画（UNDP）が発表した人間開発指標（HDI）と、それを深化させたいくつかのバリエーション指標が国際開発関係者の大きな注目を集めている。さらに95年には、日本が世界に先駆けてグリーンGDPのコンセプトに基づく数値を発表し、環境破壊による経済的損失を勘案した経済の試算が試みられた。また米国のシンクタンクがGPI（生活進歩指標）という新たな指標を使って同国経済を試算し、1960年代以降、米国の生活レベルは下降する一方であるという結論を出した¹。このように、経済的な富の大きさと「豊かさ」（ないし福祉）が必ずしも比例するわけではない、そうではなくて「生活の質」こそ問われなければならないポイントであるというのが一般的な見解となっている。

こうした指標が開発され、活用されるのは、それぞれの社会（一般にそれは国家という「領

¹ 週刊宝石1995年12月21日号、70ページ。ただし、GDPにしてもGPIさらにはHDIのように、いくつかの指標からなる合成指標の作成に対しては、实际的でないという批判が以前から存在する。1980年に出席したUNESCOの指標作成に関する勧告がその代表的なものである。合成指標を作成するより、いくつもの個別指標にもとづいて比較するほうがよほど実態把握が正確になると指摘されることも多い。

域」になるが)が、どの程度幸せであるのかを、あるいはどの程度豊かであるのかを比較したい、ということからきている。さまざまな指標を使うことで、諸社会を表面上比較することは可能になる。しかし、「生活の質」の向上とは何を意味するのか、人間はなにによって、あるいはどうすることによって、充足・満足を得るかという点が明確に示されないことには、「幸せ」「豊かさ」を比較する指標を列挙することはできても、それらは恣意的なものに留まらざるをえない。つまり換言すれば、人間のニーズ充足の問題、その概念を明確にしたうえで指標や数字を提示する作業が不可欠であるということである。

したがってニーズの充足や貧困概念についての考察は、実際に何人もの学徒によってなされてきた²。これらを踏まえた上で新たなニーズ論・貧困概念を構築し提案することは、筆者に

² 本稿は 80 年代以降に出されたニーズ論を扱っているが、取り上げられていないものも多い。一般的な経済学にとってニーズ概念は、本稿の問題意識とは少々異なる。日本の大学でもっとも活用されている経済学の教科書のひとつである『ミクロ経済学』（伊藤元重著、日本評論社、1994）では次のように話が導入されている。

「人々が商品を需要するのは、その商品を消費することによって幸福感を感じるからです。消費に対するこのような見方はあまりに素朴であるという批判もあるでしょうが、ここでは取り合えずこのような立場に立つことにします。経済学ではこのような消費の喜びを、「効用 utility」とよびます」（46 ページ）

このように経済学が前提としているのは、主観主義と「人間は効用極大化をめざす存在」という 2 つの概念（功利主義とよばれる）である。それが GNP 信仰の概念的基礎にはなっている〔佐藤、1993〕。そして、社会の厚生とは個々人の効用を足し合わせた全体ということになる。では、ここでいう「喜び」「欲求」の度合いをどうして計測するかというと、市場のなかで表明される個人的な選択（いわゆる消費行動）から推測するのである。ここから経済学は必然的に、人々が消費する商品の量によって計測する実質所得こそが福祉の度合いを示すものとして捉えるようになっていく。GNP が、「良くなっている＝発展している」ことを測る指標として機能するようになった思想的背景はこのようなものである。しかし、必ずしも GNP の増大に比例して、生活実感として「よくなっている」とは言えないのが現実であることは論をまたない（もちろん全面的に反比例するわけではない。）。それでもなお GNP 指標が廃れないのは、ニーフによると「経済学において人間的ニーズの充足についての議論が不十分だからである」（1992）となるが、経済学においては主観主義と相対主義が根本にあるので、この領域に踏み込む必然性がないといえよう。換言すれば、経済学は人間のニーズや権利といった概念を欠いている〔フリードマン、1995、254 ページ〕ともいえる。

とつてもとより荷が重すぎる。そこで本稿では、1980年代から今日にいたるまでの代表的な人間のニーズ論=貧困概念の変遷をレビューし³、ニーズの充足を論じる際に何が重要な課題になっていたかを確認しておくことを目的としたい。そのために以下の順に考察を進めることにする。

まず第1節では、ラムゼイの仕事に依拠しながら、1970年代までの代表的なニーズ論を概観する。そして文化相対主義者との論争の中でそれらが突き当たった理論的な壁について言及する。その壁に対してブレイクスルーとなったのが、アマルティア・センのケイパビリティ概念である。第2節において同概念を概観する。第3節では、センの貧困概念に依拠しながら、それを改良しようとしたマックス・ニーフとドヤル／ガフのニーズ論について考える。そこでのポイントは、いかにして異文化間でニーズの充足度を測ることが可能になるのかである。異文化間でのニーズ充足の比較とは、人間のニーズ充足の度を先進国と発展途上国社会との間においても比較可能なものにしようとする試みであるといえる。そして第4節では、こうしたニーズ概念をどのようにして「実践の現場で使えるもの」（操作可能なものにする operationalization、以下本稿では「操作化」という用語を使う）にできるかを考えた作業について概観する。ここではセン自らが中心となってこの操作化にチャレンジしたといわれる人間開発指標（HDI）の意義と限界について考える。それを受けて、開発における参加の概念を念頭におきながら、ニーズの充足手段を設定していく行動主体（アクター）の問題について考える。最後に「むすびにかえて」では、論じたポイントを再度整理しておく。なお、「人間のニーズ」という表現は、以下において「ニーズ」と表現することにする。

第1節 セン以前のニーズ論

本節では、まずラムゼイによって取り組まれた代表的なニーズ論のレビューを概観する。そ

³ 本稿で取り上げる代表的な論者は西洋人だけではない。センはインド人であり、英国、米国での研究生生活が長いとはいえ、インドの大学でも教えていた。非西洋的価値観のひとつとしてイスラムにおけるニーズ充足はどうなっているのかを *Distributive Justice and Need Fulfilment in an Islamic Economy* という書物から探ってみた。同書では、1970年代に国際機関が提起したベーシックニーズと同じ項目が列挙され、そのあとすぐに「いかにしたらニーズ充足が可能か」という設問になる。そして答えは、「イスラムは制度的に保証している」となるので、議論する余地もない。同書が適切でなかったとしかいいようがないので、本稿でイスラムは扱うことができなかった。筆者にとって今後の課題である。

の次に、1970年代半ばに国際機関によって提唱されたベーシック・ヒューマン・ニーズ (BHN) 概念の限界性をかんとんに論じる。そして、人間のニーズはすべて社会的に決定されるとする現象学の立場からの「ニーズ相対主義」について言及する。この立場は、人間のニーズは普遍的に存在するという立場と対立している。

ラムゼイは『Human Needs and the Market』(1992)のなかでニーズに関する10名の論考をレビューし、それらが提示するニーズ項目は6種類に括ることが可能であると結論づけた。それを示したのが表1である。10名とは、時代の順に並べると、ブレンターノ(1908)、マズロー(1943)、エーリッヒ・フロム(1956)、ヴァンス・パッカー(1960)、ロバート・レイン(1969)、クレッチ他(1969)、ニールセン(1977)、J.C.デイビス(1977)、ガルトウング(1980)、モールマン(1980)である。いずれも、時代と文化に関係なく普遍的ニーズは存在するとの立場にたっている⁴。

ブレンターノとマズローはいずれもニーズを序列として存在するものととらえた。すでに周知のことではあるが、マズローは本能的でかつ普遍的な5つのニーズを上げ、ひとつのニーズが満たされると次のニーズが生じると考えた。この立場にたってそれに改良を加えたのがデイビスである。フロムは、ニーズは各人の存立基盤の条件に根差すものととらえた。モールマ

⁴ このなかでガルトウングがもっとも多くの項目を挙げている。表に入らなかった項目を下に記す。

◆福祉のニーズ：①栄養、水、空気、睡眠②行動、排泄③天候・環境から身を守る④病気から身を守る⑤過度の緊張から身を守る⑥自己表現、対話、教育

◆アイデンティティのニーズ：①自己表現、創造、実践、仕事②自己実現、潜在力の発揮③よい生活、幸福、喜び④行動的で主体的であること(受け身、客体でない)⑤挑戦、と新しい体験⑥愛情、愛、性、友人、配偶者、子孫⑦根、所属していること、支えられていること、尊厳、同じ類の人との交わり・繋がり⑧社会的に力を発揮すること、社会的な透明性⑨自然とパートナーとして関る⑩目標、生命の意味、超越的存在を怖れ敬う感情。アイデンティティのニーズは自己の疎外を避けるという意味ももつ。

◆自由のニーズ：①情報・意見の受信・発信における選択②訪問する(される)人を選択③意識形成における選択④動員における選択⑤対立における選択⑥職における選択⑦住む場所における選択⑧配偶者における選択⑨財・サービスにおける選択⑩ライフスタイルにおける選択。

自由のニーズでは、選択肢に対する自由=抑圧を避けること、という点を挙げているが、次節で論じるセンの発展観に繋がるものとして注目される。センのそれは、選択肢の拡大プロセスこそ開発であるとするものである。

表1 10人によるニーズ一覧

	Brentano	Maslow	Fromm	Nielsen	Lane	Davies	Packard	Galtung	Mallman	Krech等
身体的生存の ニーズ	いのちの維持 (食、衣、休) 癒し 清潔	生理的ニーズ	前提	十分な食、住 リクリエーション	前提	身体的ニーズ	前提	福祉のニーズ (6ケ)	存在、暮らし 生存 維持	身体に関する
性的ニーズ	性的ニーズ	生理的ニーズ 所属感と愛	関係性	愛 性的満足	一貫性(感情の) 社会一繋がり/ 愛されている 実感	社会的影響力	感情面の安全 愛 所属感	愛情 愛、セックス 友人、配偶者 子孫	共生 共住	性の喜び
安全のニーズ	死後への備え 将来への備え	安全	根をはっ ていること	安全 保護	一貫性―― 感情 論理 正直さ	危害からの 安全	感情の安全	安全――暴力を 避ける	安全 保護	多数
愛と関係性の ニーズ	性的ニーズ 他者による認知	所属感と愛	関係性	愛 親交 共同体感	社会ニーズ	社会的影響力 ニーズ	愛 所属感	愛情、愛 セックス友人 根、所属感 他者との繋がり	共生、共住 所属感 愛	他者との繋がり 実感
尊厳と アイデン ティティ	他者による認知	尊厳	アイデン ティティ感 個人性	認知 尊厳	モラル 尊厳 表現のニーズ	自尊	自尊 エゴの満足 認知と地位 権力・不滅感	アイデン ティティ (10ケ)	尊厳	自己に関する 側面
自己実現 のニーズ	娯楽 科学・芸術教育 創造のニーズ	自己実現	超越性と 創造性	意味ある仕事 関与感 娯楽	自己実現の ニーズ		創造性 権力と不滅感	自己表現 対話、教育 自由(10ケ)	成長、完全性 発達、刷新 超越性、創造 意味、シナジー	多数

(注) Ramsay (1993, 175-176ページ) より作成

ンは、すべての人間にとって病むことを避けるために必要なものと考え、それは遺伝子にねざすものと考えた。レインは、10 項目のニーズを示し、それらは政治的存在である人間の行動を理解する上で重要なものにとらえた。ガルトゥングは、もしベーシック・ニーズが満たされないとしたら、当該の個人に何らかの深刻な解体が生じるだろうと考えた。

これら 10 名のニーズ論に対する分析からラムゼイは、身体的ニーズを前提にしていたり、抽象的にしか提示していないものもあれば、具体的な中身を提示しているものもあったりと、多少の相違はあるものの、大枠では以下の 6 種類のニーズに括ることが可能であるとした。それらは、身体的生存のニーズ、性的ニーズ、安全のニーズ、愛と関係性のニーズ、尊厳とアイデンティティのニーズ、自己実現のニーズである。マーケティング理論に立脚しているパッカードが挙げた「隠れた 8 つのニーズ」も、哲学的側面から考察している他の論者が挙げた項目とほぼ一致することは興味あることである。いずれの論者においても、身体的側面だけでなく精神的側面を抜かしていない点をここでは確認しておきたい。

次に、1970 年代半ばに ILO（国際労働機関）や世界銀行によって提唱されたベーシック・ヒューマン・ニーズ（以下 BHN と略す）コンセプトをもとに、それがニーズを考える際にどのような意味をもつものなのかを考える。周知のように BHN 路線は登場後わずか数年のうちに国際機関のなかでは論議されるようなことはなくなった。しかし 80 年代には、世界の貧困層がまず開発の利益を受けるべきだとする NGO 等一連のグループの開発路線でのよりどころとなって生き延び、90 年代に入って形を変えてではあるが、世界銀行や幾つかの国連専門機関のなかで復活していることは衆目のとおりである。

BHN の基本的な考えは、「食、住、衣という人間にとって最低限の必要が充足されると同時に、飲料水や衛生、教育、健康、交通といった地域コミュニティのミニマムも充足されなければならない」とするものだった。しかしこの概念に対してタウンゼントは次のように批判した。

「（ベーシックニーズの発想は）20 世紀初頭に英国で施行され始めた「貧困法」の思想的基盤となっている生存のためのニーズ概念⁵ をコミュニティ・レベルにまで広げたにすぎない。それは身体的なニーズ面を扱っているだけで、精神的なニーズ面への切り込みが欠けている」というものであった [Townsend, 1993, 32 ページ]。実際表 1 で示した 10 名のニーズ論と比較して

⁵ ここでの貧困の定義は、「効率的な肉体活動の維持にとって必要最小限のものを得るための十分な所得がないなら、その世帯は貧困である」「可処分所得が貧困ラインを下回る世帯は貧困世帯として扱われる」というものである。 [Townsend, 1993, 30 ページ]

みても、BHN がきわめて一面的にしかニーズをとらえていないかがよく理解できるであろう。

一方フリードマンが指摘するように、官僚にとってニーズ概念とは、「すでに存在するメニューのなかでプライオリティをつけること、また、ニーズは充足されるものでなければならぬし、充足されないとしたら生みだすことが可能なものでなければならぬ」ものである〔フリードマン、1995、109 ページ〕。ここでは精神的なニーズの考察という哲学的領域に立ち入ることはそもそも不可能だということになる。こうした BHN 概念に対しての批判から示唆されるものは、開発を实践する行政側にとってニーズの概念はそのようなものにならざるを得ないという点であろう。ということは、精神的なニーズの重要性を強調する立場にある者も（仮にここでは哲学者としておく）、ニーズを抽象的に提示するだけではだめで、どれだけ操作化して提示できるかが問われているといえよう。この点については後の節で取り上げる。

次に、ニーズは普遍的な存在なのか相対的な存在なのかという点に言及する。相対的立場をとる代表が、英国の著名な社会政策学者であるタウンゼントである。氏によると「貧困とは相対的剥奪である」との立場をとる。それは次のように定義される。

「生活への諸条件を欠いていたら（否定されたら）、そしてそのことで社会の一員として満足できないなら、その人たちは貧困である」「生活するための条件をまったく（あるいは十分に）もっていないなら—食料、快適さ、水準、サービス、そしてこれらは社会において他者と交わり、参加し、慣例的な行動をとり、そうすることで社会の一員であると実感できるもの—こうしたものを持っていない人は権利剥奪状態にあるといえる」〔Townsend、1993、36 ページ〕タウンゼントはすべての文化歴史を貫通する普遍的なニーズというものは存在せず、それはすべて社会的な産物であるとする。その上で 1980 年代の英国における基本ニーズ指標を考案している。ニーズを物的剥奪と社会的剥奪とに二分した上で、小項目として 13 項目を挙げている。表 2 に示したものがそれである。各項目に示された構成項目（一段下の階層）は、その基本ニーズの充足手段という形では示されていない。ここでは基本ニーズは剥奪ととらえられる。したがって、「〇〇の剥奪（欠如）」という否定形でニーズをとらえるのが特徴である。

前述の 10 名が論じた普遍的ニーズの存在の考察も、普遍ニーズとはいったいどのような概念装置の中でとらえられなければならない概念なのかを、うまく示せなかったが故に、タウンゼントのような相対主義に対しても、また主流の経済学に対しても説得力をもつに至らなかった

表2 相対的剥奪論における指標案 (Townsend)

物的剥奪

1. 食における剥奪
 - この2週間で少なくとも1日は不十分な食事だった
 - 過去12か月の間に少なくとも1回は家族の必要を満たすだけの食がなかった
 - ほとんど毎日新鮮な肉ないし魚は食えない
 - ほとんど毎週、特別な食事ないし焼き肉を食えない
 - ほとんどの日は果実を食えない
2. 衣服における剥奪
 - 各季節に即した靴が十分でない
 - 十分な雨具がない
 - 十分な防寒具がない
 - 使える靴下(ストッキング)が3足以下である
 - 更衣室がない
 - 過去12か月の間に中古衣料を買った
3. 住居における剥奪
 - バス・トイレがない
 - 電気がない
 - 湿気をとる設備がない
 - ダニ等の虫に悩まされる
 - 足の便が悪い
 - 部屋数が少なく混み過ぎ
 - 外部構造の欠損
 - 内部構造の欠損
 - 冬季の間全室に暖房がない
 - 外観・インテリアの程度がよくない
 - 訪問客があっても泊める部屋がない
4. 家庭内の設備における剥奪
 - 車がない
 - テレビがない
 - ラジオがない
 - 洗濯機がない
 - 冷蔵庫がない
 - 冷凍庫がない
 - 電気アイロンがない
 - ガスないし電気炊飯器がない
 - 電気掃除機がない
 - セントラルヒーティングがない
 - 電話がない
 - 主たる部屋に敷物がない
5. 環境における剥奪
 - 5才以下の子供が野外で安全に遊べる場所がない
 - 5～10才の子供が安全に遊べる場所が近所がない
 - 家の近所は交通事故の危険がある
 - 庭がない
 - 工業的大気汚染がある
 - 他的大気汚染がある
 - 車、航空機、工事等の騒音問題がある

6. 立地における制約
 - 気軽に歩いて行ける距離に公園のような場所がない
 - 10分以内に日常品を売っている店がない
 - 道にゴミが散乱している
 - 10分以内に開業医、ないし病院がない
 - 近所に青少年や老人のためのリクリエーション施設がない
7. 労働における制約
 - 劣悪な労働環境（大気汚染度5+）、ホコリ、騒音、振動、暑すぎ寒すぎ
 - 1日の3/4以上が立ったまま、あるいは歩く仕事
 - 反社会的時間での労働
 - 内部・外部の アメニティの低さ
 (7.に関してはオルタナティブ案がある)

社会的制約

8. 雇用における諸権利の欠如
 - 過去12カ月の間における2週間以上の失業
 - 1週間以内で契約が終了する対象
 - 有給休暇なし
 - 雇い主もちの（あるいは補助金のかたちで）食事がつかない
 - 年金がつかない
 - 病欠の際、「最初の6か月に関しては給与の全額支給」という規約の適用外
 - 先週、50時間以上働いた
 - 労働において人種、性、障害、年齢、等にもとづく差別を体験している
9. 家族単位での活動における制約
 - 室内で子供が遊ぶには困難
 - 過去12カ月の間家族旅行をしていない
 - 過去12カ月の間家族で外出をしていない
 - 過去12カ月の間家族とあるいは友人と過ごしていない
 - 家族のなかに病気の者がいる
 - 障害者、高齢の者のケアをしなければならない
10. 地域社会との交流の欠如
 - 人々からの孤立孤独
 - 通りが相対的に危険
 - 人種上のいじめ
 - 病欠の際、支援を期待できない
 - 家の内部あるいは外部に他者への支援のあてがない
 - 過去5年間で、3回以上家を替わった
11. 社会制度への参加の欠如
 - 前回の選挙で投票せず
 - 労働組合、職員組合、文化「教室」、スポーツ、政治等に参加せず
 - ボランティア活動に参加せず
12. リクリエーションの制約
 - 過去12カ月の間、旅行していない
 - 1週間の内、趣味にあてる時間が3時間以内
13. 教育における制約
 - 学歴が10年以下（60才以下の者のみ）
 - 教育上の資格がない

注：Townsend, 1993, 71～74ページを訳出

6。

こうした状況におけるひとつの典型的な対応としては、一切、指標をつくらないという選択があった。もう一つの選択として、特定の政治的立場に最も沿うようなかたちで指標をつくることであった [Doyal/Gough、1991、155 ページ]。こうした理論上の行き詰まりのなかでひとつのブレイクスルーとなったのがセンの貧困概念である。次にセンの貧困概念について考える。

6 ところで、普遍的ニーズとは何なのかについて考えなければならない。それは欲求とはどう違うのか。これもひとつの例から考えてみよう。「私はタバコを欲しい (want) けれども、禁煙する必要 (need) がある」という表現が、両者の違いを表している。こうしてみるとニーズとは、「たとえ欲しないものであっても、我々はそれを必要としているもの」あるいは、「我々がその存在を知らないとしても、必要としているもの」といえよう。なぜこうしたニーズが存在するのかについては、ドヤル／ガフによると、人間とは「自らが重大な損傷を蒙るのを避ける」ことを究極目標とする存在だからである。

ラムゼイによると、ニーズは客観的にまた経験的に目標を達成するための手段として定義できる。その目標とは、すべての人間が求めたり願ったり価値をおいたりするに足るものである（もし人間が、それがどんなものであれ目標を達成したり、価値を実現するために行為するものであるとするなら）。目標を達成するための行為のために、それに必要な手段と条件をもつ。その行為に必要な条件が普遍的な人間ニーズであり、それは「生き残り（生存）」と「身体的・精神的健康」である。普遍的な人間ニーズは生存と健康のために客観的に必要なものである。それらが人間の生物学的、心理的構成の産物であるとするかぎり、それらは一般的で抽象的で相対的に変化するものではない。

ラムゼイはこの普遍的な人間ニーズの下にフェルト・ニーズと欲求が位置するとする。前者は、我々が我々のニーズはこれだと感じるものである。それらは主観的に経験され、信じこんでいるものである。欲求とは、あることを願ったり、好んだりするための表現可能なものであり、また考慮や信念、選択、判断等の結果である。ニーズも欲求も手段的 instrumental である。しかし欲求は特定の目的 (end) に関係しているのに対して、ニーズは生存と健康という、客観的で普遍的な目標(goal) に関係している。また、欲求は主観的に価値があるが、ニーズは客観的に価値があるものである。なぜならニーズは心の状態に左右されない客観的な「必要」であるからである。フェルトニーズや欲求、好みとは異なって、我々はニーズを必ずしも知らなかったり、直接経験できない。ニーズの存在に対する証拠は、人々がいう「これがニーズです」という主観的な発言からは示せないものである。さらにいうと、ニーズは選べないもので、欲求は選べるものである。

第2節 センの貧困概念

1980年代に入って『貧困と飢餓』をはじめセンの著作が次々と発表されるにつれ⁷、国際開発界において、成長優先の開発モデルを根本的に批判できるだけの理論的な概念装置が出現したととらえられ、その後国連諸機関の中で開発理論の中心的概念となっていくのである。セン理論の核心をなす概念はケイパビリティ **Capabilities** である。ケイパビリティ（潜在能力）は、「ある人が、経済的、社会的、および個人の資質のもとで達成することのできる、さまざまなことであること」> (being) とくすること> (doing) を代表する、一連の選択的な機能 (functioning) の集まり」と定義されている。

生活の質をいかにして測るのかという問題意識を基本にするセンは、人々がどれだけの財を必要とするかは、その人の生活条件や環境に応じて違うことに注目している。例えば同じカロリーの食事をとっても、体の大きさ、年齢、労働の量・質、天候などの条件で、食事と栄養素に変換する能力は人によって異なる。ケイパビリティとは、その人が実現しうる諸々の状態や行為を意味する。異なる種類の生き方を歩む自由であるということもできる。その人がその環境と能力において、その財を用いてどれだけの達成が実現できるのかに注目すべきであるというのがセンの主張である〔佐藤、1993、211 ページ〕。

図1に示したように、センは貧困概念を3つの次元に分けて分析を進めている。ここでモーターバイクを例にセンの概念をみてみよう。センによると、モーターバイクはここでは **commodity** の次元に位置する。**characteristics** の次元では、「快適に移動する」という特性となる。これが **capability** の次元では「移動する能力（ないし選択肢）」となるわけである。そしてセンによると、貧困とは **capability** の次元で絶対的な概念になるが、**characteristics**（特性）と **commodity**（財）の次元では相対的な概念であるとする。つまり「移動する能力（選択肢=自由）」を欠いている状態が貧困で、センによるとそれは権利剥奪 (**deprivation**) という用語が適当であるとする。一方、「特性」と「財」はそれは各個人によって異なるし、文化時代によって異なるものだから、比較しても意味がない。そして開発とは、このケイパビリティ（選択肢=自由）の拡大過程であると考えるのである。一般的な開発=発展プロセスの解釈として「開発とは **commodities**（財=市場のためにつくられたもの）の増大過程」とであるとされるが、センにおい

⁷ 貧困と開発とを扱ったセンの著作の中で、日本語に翻訳されているものはない。（同テーマ以外の翻訳書は3冊存在する）セン概念の解説は、絵所（1994）、原（1992）がある。

ではこの点が根本的に異なっているのである⁸。

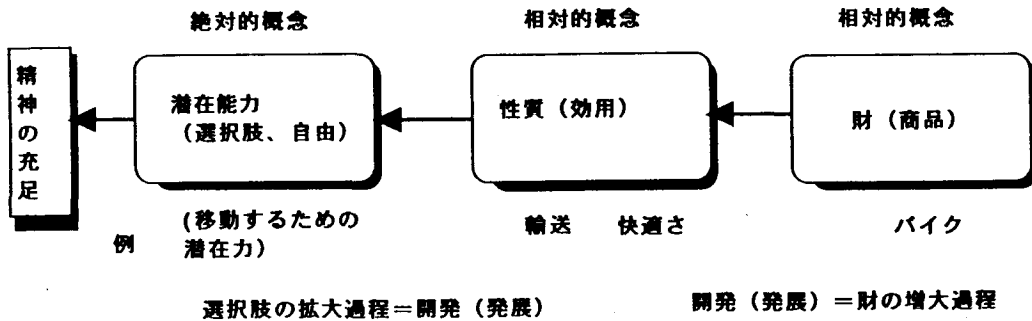


図1 A.センの貧困（発展）概念

この分析を人間のニーズ分析に応用すると、普遍的ニーズがすべての人間には時代を超えて共通に存在する一方で、欲求 *want* と好み *preference*、あるいは充足手段 *satisfier* という概念は相対的なものであるとみることができる。後者は、それぞれの文化によって異なり、またそれぞれの時代で変化するものである。伝統的な経済学ではすでにみたように、「効用」と「富」がすべてで、普遍的な存在はなく、すべては主観的に認識されかつ相対的な存在と考える。その結果、一人あたり所得が唯一のクライテリアになってきたのである。

80年代後半までのセンの貧困概念に対しては、いくつかの批判がよせられた。第一の批判は「操作化」を重視する立場からである。センはもっとも基本的なケイパビリティとして、栄養面での必要を充たすこと、避けうる病気を避けること、シェルター、衣服、移動すること、教育を受けられること、恥ずかしくない生活をおくれること、地域の活動に参加できること、自尊心を持てること、以上の9項目をあげた。しかし、項目をあげるだけで、実際に「行政の現場で使える」（*operationalization*）限定された使い方を特定していないなら、ほとんど意味はないという批判がなされた。つまり、こうした基本となる項目を羅列するだけで概念の中身を具

⁸ フリードマンは「貧困=力の剥奪」ととらえる。力とは、世帯が「いのちを育み暮らしを営む」ために必要な8つの社会的基盤のことをさす。それらの基盤へのアクセスを欠いた状態が貧困である。8つの基盤とは、防御可能な生活空間、余剰時間、知識と技能、適正な情報、社会組織、社会ネットワーク、労働と生計を立てるための手段、資金である。フリードマン（1995）参照。

体的に提示できないと、行政側は「もっとも基本となるニーズはすでに充足済み」といった烙印を押す傾向にある[Townsend, 1993, 36 ページ]。行政予算は限られていて無限でない以上、その配分は政治的力関係で決定されるものである。ニーズの問題を論じる際には、政治的にならざるをえない面があるのである。

第二の批判は文化的次元に関するものである。上にみたように、センはケイパビリティ概念を使って、人の「何をしうるか (doing) 、何でありうるか (being) 」の可能性をみることで、人の福祉を考えようとした。しかし人間は例えば「シェルターがあるかどうか」「教育を受けられるかどうか」だけでは満足しないこともまた確かな点である。シェルターといってもそこには調理できる機能が必要だし、プライバシーの確保も見逃せない機能である。さらに材質も重要な側面であろう。構造・概観は鉄筋コンクリートでも、インテリアは伝統的な「木と紙の家」に住んでいる日本人は少なくない。文化という複雑な文脈の中でケイパビリティを考えるには、他のケイパビリティとの関係に注目する必要があるのである。「シェルターとは雨露をしのぐもの」といった皮相的なとらえ方をすると、そのケイパビリティに関連している他の機能（それはケイパビリティが人にもたらしている意味、それは文化の領域である）を無視してしまうことになり、適切に福祉を評価したことにならないのである。これら二種類の課題に応えようとしたのが、ドヤル／ガフであり、ニーフである。またセン自身も HDI の開発にみられるように、第一の批判に対してチャレンジしている。次節において、まずニーフのニーズ論を論じる。

第3節 セン理論の前進

3-1 基本ニーズと充足手段のマトリックス～ ニーフのニーズ論

マンフレッド・マックス・ニーフ (Manfred Max Neef) はチリの社会科学者である。1980 年代にスウェーデンのダグ・ハマーショルド財団による "Human Scale Development" (「身のたけの発展」) に関する共同研究に参加し、中心的な役割を果たした一人である。本稿では同研究会の成果である著書『Human Scale Development 』(1991) に依拠しながらニーフのニーズ論を紹介する⁹。

ニーフはまず、A と B という 2 つの発展プロセスがあったとして、どのプロセスが「より良

⁹ 同書の原著はスペイン語 1986 年に刊行されている。日本語では、エキンズ (1987) に「身のたけの経済 - 来たるべき挑戦」のタイトルで収録されている。2 番目として山内 (1994) でも、紹介されている。

いか」という問いにいかにして答えるのかという設問から入る。その問いに答えるためには人々の生活の質がいかにして改善されているかを示す尺度が必要である。ではなにが人々の生活の質を決定するのか。ニーフはそれは基本的なニーズを十分に満たすために人々がもっている可能性次第であるとする。とすると、いったい基本的なニーズとは何なのか。それを誰が決定するのか。ニーフはこのような関心領域からニーズ論を展開するのである。

前節で言及したように、ニーフも人間のニーズは普遍的だが、その充足手段は相対的、つまり文化や時代によって変わるものという立場をとる。ニーフはニーズを「公理としてのニーズ」(axiological needs)と、「存在としてのニーズ」(existential needs)に分けることからスタートする。このうちまず、公理としてのニーズには、生存のニーズ、保護のニーズ、愛情のニーズ、理解のニーズ、参加のニーズ、無為 *idleness* のニーズ、創造のニーズ、アイデンティティのニーズ、自由のニーズという9つをあげる。ラムゼイの整理と比較すると、ニーフが挙げた9つの基本ニーズも大差がないことが判明する。強いて指摘すれば、ニーフが「無為のニーズ(なにもしないでいること)」を挙げているのが目につく程度である。そしてこれらのニーズはマズローのニーズ概念とは異なって、ヒエラルキー(序列)的に存在するものではない。この考えでは、衣食住や所得は基本ニーズとはみなされなくて、基本ニーズである「生存のニーズ」の充足手段とみなされる。ニーフによると貧困状態とは充足手段の剥奪であるが、9つの基本的ニーズのうち一つでも手段が充足されていないと「貧困」とよべるものになる。従って貧困は常に複数形で示されるべき概念で(*poverties*)、単数(*poverty*)ではないとする。

ニーフの特徴は表3をみることで理解できる。このマトリックスは、9つの公理としてのニーズと4つの存在としてのニーズ(存在するニーズ *being*、所有するニーズ *having*、実行するニーズ *doing*、相互作用のニーズ *interacting* の4形態があるとする)のマトリックスで、それぞれの桁目(セル)には、それぞれ固有の充足手段が置かれている。例えば、公理としてのニーズのなかで「理解」と、存在としてのニーズのなかの *Having* のセルをみると、その充足手段は、文献、教師、方法、教育政策、通信政策が挙げられている(ニーフは、一つの案を挙げているだけで、これら充足手段の項目は固定したものではない)。ニーフはさらに、それぞれの充足手段には経済財が存在するとする。それに従えば、文献の経済財は書物になるし、方法にはパソコンが入るかも知れない。ただ経済財がすべて、すでに存在しているわけではない。図示するとつぎのようになる。

基本ニーズ —— 充足手段 ---- 経済財

表3 ニーズと充足手段(案)のマトリックス (ニーフ)

	BEING	HAVING	DOING	INTERACTING
生存	身体的健康 精神的健康 心の調和 ユーモアのセンス	食 住 労働	養う 生殖する 休息する 労働	生活環境 社会的環境
保護	ケア 受容力 自律 心の調和 連帯	保険制度 貯蓄 社会保障、保健 制度 権利 家族	共同する 防御する 計画する 世話する 治す 援助する	生活空間 社会環境 居住
愛情	自尊 連帯 尊敬 許容 寛容 感受性 情熱 決定 官能 ユーモアのセンス	友情 家族 パートナーシップ 自然との関係	愛する 愛撫する 感情を表現する 分かち合う 耕す 評価する 世話する	プライバシー 家庭 親密さ いっしょにいる場所 形ある相互作用の環境
理解	批判的良心 感受性 好奇心 驚き 規律正しさ 直感 合理性	文献 教師 方法 教育政策 通信政策	調査する 研究する 実験する 教育する 分析する 瞑想する	学校 大学 アカデミー グループ コミュニティ 家族
参加	受容力 感受性 連帯 意欲 決定 献身 情熱 ユーモアのセンス	権利 責任 義務 特権 労働	仲間になる 共同する 提案する 分かち合う 意義を申し立てる 服従する 交わる 同意する 意見をいう	参加的相互作用の環境 パーティー 協会 教会 コミュニティ 隣人 家族
無為	好奇心 感受性 創造力 向こうみず ユーモアのセンス 静穏 官能	ゲーム スペクタクル クラブ パーティー 心の平安	夢想する じっと考える 思い出す ファンタジ 記憶する リラックス 楽しむ 遊ぶ	プライバシー 親密さ 親しくする場所 自由時間 周りの環境 風景
創造	情熱 決定 直感 想像力 合理性 自律 大胆さ 探求心	能力 技能 方法 労働	労働する 探求する 設計する 造る 構成する 翻訳する	生産的・フィードバック 環境 ワークショップ 文化グループ 聴衆 表現の場 一時的自由
アイデン ティティ	帰属意識 一貫性 差異 自尊 独断性	象徴 言語 宗教 習慣 慣行 規範 仲間グループ 価値 セクシュアリティ、 歴史的記憶 労働	コミットする 自己統合 直面する 決定する 自己を知る 自己認識 自己実現 成長	社会リズム 日々の環境 自分が属している環境 成熟段階
自由	自律 自尊 決定 情熱 独断性 開かれた心 大胆さ 反乱性 寛容	平等の権利	意義の申し立て 選択 異なる 危険があっても 意識 コミットする 不服従	一時的/空間的柔軟性

注：Neef、1991、32ページを訳出

さて本稿が取り上げるニーフとドヤル／ガフの二者によるニーズ論の特徴は、異なる文化間、ないし異なる発展段階間においても、人間のニーズの充足度合いを比較することが概念上、可能にしようという試みである。ニーズ、充足手段、経済財と三つの側面に分けて分析するニーフの試みは、この課題に対してある程度成功したといえよう。山内はニーフのニーズ論について次のように解説している。

「クローゼットに入りきらないほどのオートクチュール製の洋服を持っている女性も、腰みのしかつけず、ボディ・ペインティングをしている〈裸族〉の女性も、同じことをしているにすぎない。社会的に自分の存在価値と存在意義を受け入れ、認めてもらうこと、美しくなり、愛し愛され、そのことで自分の存在証明を実感することが、その本当の目的だからである」〔山内、1994、213 ページ〕

ニーフの概念装置を使うことによって、物質的に富んだ社会においても貧困が存在し、またその逆として、物質的には富んでいない社会においてもニーズの充足がなされていることを、概念的に説明することが可能になったといえよう。またニーフは「ニーズのトレードオフ」という呼び方で、あるニーズの充足手段が剥奪していると、他のニーズ充足手段の発達によって充足が代替されることも説明している。例えば、生存ニーズの「所有するニーズ」の充足手段が大きく剥奪している社会では、愛情ニーズの充足手段がきわめて発達している可能性があるとするのである。センが *commodities*（市場で手にいれることができる財）と *characteristics*（特性）の次元で異なる社会の貧困を比較することは意味がなく、*capabilities* の次元でのみ議論できると提起したが、ニーフのニーズ論によって、異なる文化の間でニーズの充足度合いを比較することが概念的な形ではあるが、より明瞭になった。つまりセンに対する批判の一方はニーフによって前進したといえよう。センにもとづいてニーズ論を前進させようとしたもう一人の存在がドヤル／ガフである。次節ではドヤル／ガフのニーズ論を例に、ニーズ概念の操作化へ向けた努力をみることにする。

3-2 媒介ニーズの提起～ドヤル／ガフのニーズ論

次にドヤル／ガフの著書である『A Theory of Human Needs』（1992）に依拠しながら、そのニーズ論を紹介する¹⁰。二人は、基本的な人間のニーズは普遍的・客観的に存在する一方で、

¹⁰ 日本語で読めるドヤル／ガフの文献は、エキンズ（1987）のなかに「人間的ニーズと社会変革のための戦略」のタイトルで収録されている。両者の学問的背景であるが、ドヤルは哲学、一方ガフのそれは社

その財やサービスといった充足手段は時代と文化によって変化する固有性をもつものであるとの前提に立つと、異なる文化のあいだでニーズ充足の度合を測る（比較する）にはどのような方法で可能になるのかという点について答えようとしている。

ドヤル／ガフのニーズ概念を図式化したものが図2である。まず二人が、基本的な人間のニーズをどのように定義しているか、からみてみよう。

「あらゆる人間の目標は、特定の文化に応じて特殊化されるのであるが、これらの目標を達成するために、人々は行為をしなければならない。そのような行為がなされるには、一定の前提条件がある。熟考し、選択する知的能力がなければならず、次に決定したことを実行に移す身体的能力がなければならない。換言すれば、行為が成功するためには、肉体が生きながらえることが必要であり、また自分で考えて行為をおこすために自分を知ることと自分を律することが必要となる。したがって生存と自立（斉藤注、原文は自律）とは基本的ニーズである。このふたつは、概念的にも経験的にも、他の目的を達成するための前提条件である。ただし実際には、他のいかなるニーズより先に充足されなければならないものは生存というより、むしろ身体的・精神的健康ニーズである」〔エキンズ、1987、84-85 ページ〕

さて個人は、ここに定義した基本ニーズの充足を通じて目標を達成するのであるが、そのためにはその個人が関わる社会・集団にある種の共通の前提条件が不可欠となる。ドヤル／ガフは、個人の基本ニーズを普遍的存在にとらえると同時に、この社会・集団の前提条件（これはいわば社会の基本ニーズとでもよべよう）も普遍的なものとする。そして前提条件として4点を挙げるのである。物的生産、物的再生産、文化の継承（コミュニケーション）、そして政治的権威である。物的生産とその再生産は、どの社会であってもその社会がうまく働くために不可欠なものとして容易に理解できよう。とくに将来世代のニーズ充足をも統合するサステナビリティ（持続可能性）の考えからは再生産は重要である。ただ、人間は自分の属する社会の物的生産・再生産の様式やルールについては学習によって習得しなければならない。そこでコミュニケーションないし「文化の継承」が必要となる。さらに社会（文化）に固有の一連のルールがただ存在しているだけでは、その存続や実施を保証することができない。そこにはある種の政治的権威のシステムが不可欠なのである。

こうして異なる文化間においてもニーズ充足の計測を可能にしようとする二人の試みは、どの社会でも共通する社会の前提条件（社会の基本ニーズ）を考案することで一歩前進したが、

会政策である。

図2 ニーズ理論概念図 ドヤル/ガフ

(注: Doyal/Gough, 1991、170ページを訳出)

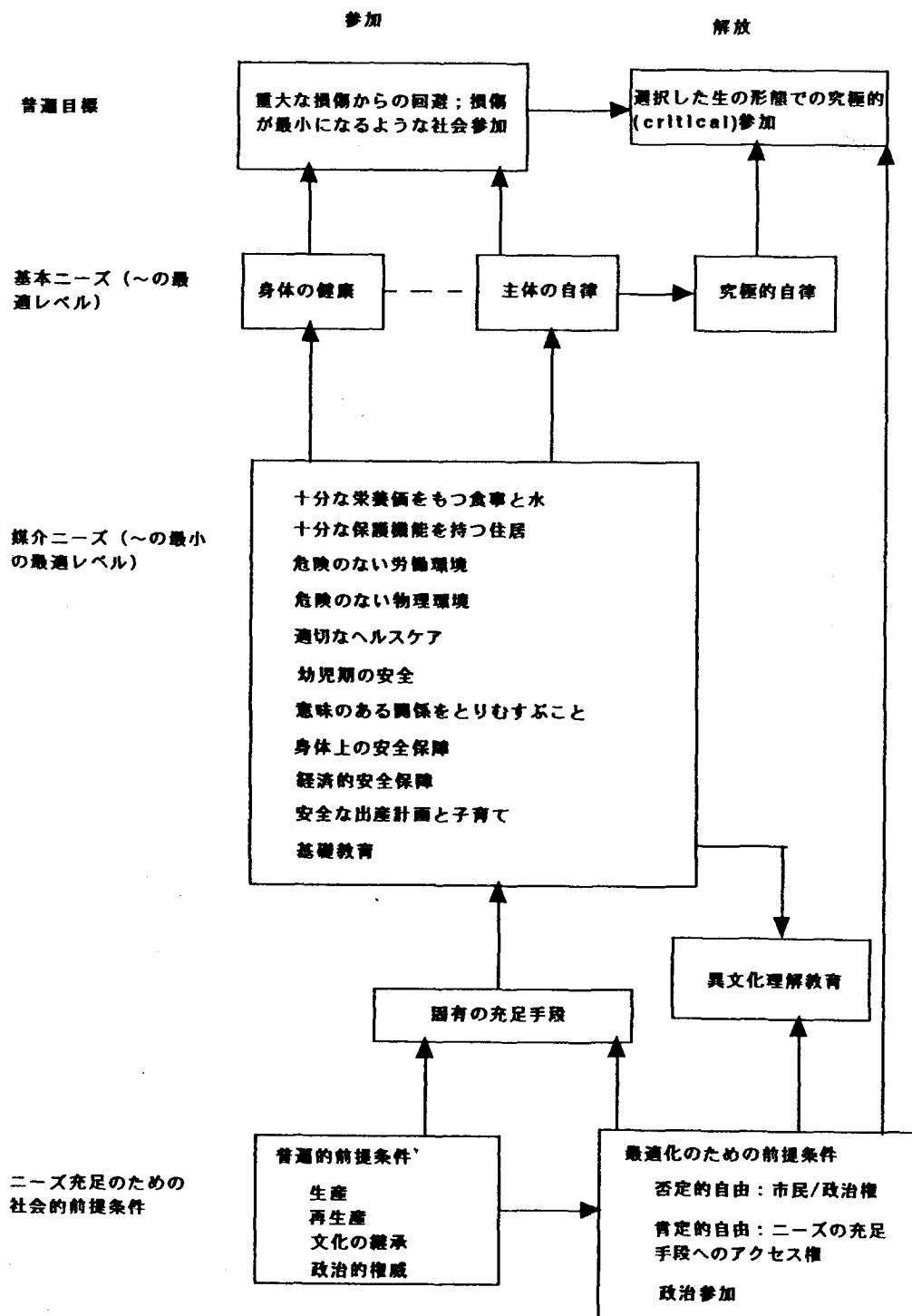


表4 基本ニーズ充足の指標案

ドヤル・ガフ

Doyal/Gough,1991,190ページを訳出

基本ニーズの構成要素	指標案
身体的健康	
生存機会	● 各年齢毎の余命 ● 特定の年齢層毎の死亡率、とくに乳児・5才未満児の死亡率
身体的不健康	■ 障害者の割合（障害の程度に応じて） ■ 発育障害で苦しむ子の割合（障害程度に応じて） ■ 重度の痛みに苦しむ人の割合 ■ 各種疾病毎の死亡率
自律	
精神的混乱	● 重度の精神病、うつ、他の精神疾患の割合
認識における欠乏	☆ 文化に即した知識の不足 ● 非識字 ■ 数学、科学、その他普遍に近い基本技能の不足 ■ 世界言語を操る技能の欠如
経済活動のための機会	■ 失業、意味ある社会的役割からの排除に関わる他の尺度 ■ 生産・再生産活動をした上での自由時間の不足

●：相当程度信頼できる普遍（またはそれに近い）データ

■：数カ国のみ有効なデータ、しかし操作化に関しては明確。

☆：より観念的な指標案

表5 最適化のための社会的前提条件の指標案 ドヤル・ガフ

Doyal/Gough,1991,245ページを訳出

社会的前提条件	社会指標の例
市民権/政治権の遵守 政治参加	● 国連で決議された権利の遵守程度を示す指標 ■ 代議制民主主義の指標 ☆ 政治における市民の影響力を示す諸指標
ニーズ充足のための諸権利がよってたつ物的基盤	
充足手段の生産 充足手段の分配	☆ 一人当たり「基礎品目」生産の価値 ■ 最低辺縁の実質所得（各発展段階毎にそのもっとも高いパフォーマンスを示す国との比較で）
ニーズの変換	☆ 基礎品目消費に対するニーズ充足手段の比率 ● 国民の男女比
物質的再生産	● 一人当たり再生不能エネルギー消費 ■ 一人当たり温室効果ガス排出 ● 出生率

表6

媒介ニーズ充足の指標案

ドヤル・ガフ

Doyal/Gough, 1991, 219ページを訳出

普遍的充足手段特性の指標	社会指標
1.食糧と水 適正な栄養摂取	● FAO/WHOの基準を下回るカロリー消費 ■ 摂取基準を下回る他の栄養素の消費 ● 十分な安全飲料水へアクセスできない人の割合 ● 栄養失調・栄養不足に苦しんでいる人の割合 ● 低体重乳児の比率 ■ 過剰体重/肥満の人の比率
2.住居 住むに耐えるシェルター 住むに耐える基本サービス 一人当たりの住むに耐える スペースの存在	■ ホームレスの比率 ■ ふつうの気候でさえ住むに耐えない構造を持つ住居の比率 ● 安全な衛生設備を欠いている人の比率 ■ 一部屋に住める人数を上回って住んでいる世帯の比率
3.労働 危険のない労働環境	■ 特定の危険性のある労働の比率 ☆ 感情面/認識面での自律を妨げる労働の比率 ● 労働災害による死亡/傷害 ● 職業病による死亡/疾病
4.物理環境 危険のない環境	■ 特定基準を上回る汚染源の集中度 (大気、水、土地、放射線、騒音等)
5.ヘルスケア 適正ケアの備え 適正ケアへのアクセス	● 特定基準を下回る人口当たり医師数/看護婦数/ベッド数 ● 地域保健サービスへのアクセスがない人の比率 ● 特定の病気に対する予防接種が完全になされていない比率
6.幼児期のニーズ 幼児期における安全性 発育	☆ 打ちやられる、虐待、無視状態にある幼児の比率 ☆ 刺激づけ、肯定的なフィードバック、責任等が与えられていない人の比率
7.支援グループ 大切な他者の存在 基本的な支援グループ	☆ 親密で「腹を割って話せる」関係を持てる人がいない人の比率 ■ 全くないか極めて低い社会的接触しかない人の比率 ☆ 必要が生じたときに呼べる人がいない人の比率
8.経済的安全保障 経済的安全保障	● 絶対的貧困の比率 ☆ 相対的貧困の比率 (参加水準) ■ 特定の不慮の事故に対する備えを欠いている人の比率
9.身体上の安全保障 安全な市民生活 安全な国家	● 殺人率 ■ 犯罪犠牲者の比率 ■ 国家暴力の犠牲者 ● 戦争の犠牲者
10.教育 文化的技能へのアクセス 異文化知識へのアクセス	● 初等/中等教育の不足 ● 特定基準を下回る公教育年数 ■ 特定基準の資格の不足 ● 高等教育の不足
11.出産計画と子育て 安全な出産計画 安全な子育て	● 安全な避妊手段と中絶へのアクセス ● 母親の死亡率

充足手段が文化に固有のものである以上、これだけではまだ相互比較が可能になるとはいえない。そこでドヤル／ガフは「充足手段がもつ特性（characteristics）」という概念を考案し、これはどの文化においても普遍的と考えるのである。例えば、食におけるカロリーがその普遍的 universal な充足手段の特性にあたり、また「危険のない労働環境」がそれにあたるものである。このように普遍的 universal な充足手段の特性は、基本的ニーズと、文化によって固有の充足手段との間を橋渡しする概念で、換言すれば固有の充足手段が手段として機能するための目標とみなせるものである。よってドヤル／ガフは「媒介ニーズ」と名づけた。図3の「媒介ニーズ」として挙げられている11項目がそれである。そして、普遍的次元に位置する「基本ニーズ」「媒介ニーズ（普遍的な充足手段の特性）」「社会的前提条件」のそれぞれについて指標案を提示している。表4から表6までがそれである。それぞれの指標は否定形をとっている。タウンゼントもそうしていたように、否定形をとることによって比較が可能になるのである。

以上かんたんにドヤル／ガフのニーズ論をみたわけであるが、センが80年代前半に提起した貧困概念にもとに、新たに媒介ニーズ概念を導入し指標案を出すことで、操作化に向けて一歩進めたのがドヤル／ガフの功績だったといえよう。

第4節 操作化に向けて～人間開発指標（HDI）の革新性と限界

1990年に入ってUNDPは人間開発指標（HDI）を発表した。以来、HDIが国家の開発パフォーマンスを評価する上でのマイルストーンとなりつつある。前節で取り上げたセンのケイパビリティ概念の根幹である「人間の選択肢=自由」を経済の豊かさよりも開発の目的として上位に位置づけて、そのための指標づくりが試みられた成果がHDIである¹¹。

HDIは寿命、知識、生活水準の3つが人間開発にとってもっとも基本的な要素であると考えられる。寿命は平均余命を使い、知識は成人識字率（3分の2の比重）と平均就学年数（3分の1の比重）を組み合わせたものを使う。生活水準は、各国の生活費によって調整された一人当た

¹¹ ただし経済成長と生活の質の改善には強い相関関係があることははっきりと指摘されている。その上で成長の成果がどう配分されているかに強い関心が向けられている。同時に、人間開発という場合「人的資本」として人間をみていないことは次の表現によっても明らかである。「だがこれは人々が自らの能力を高め、その能力を適正に使える経済や政治的な環境を創り出すことができるかどうかにかかっている。それはまた経済的な豊かさをはるかに越えた人間の選択の自由にもかかわってくる」（1994年版、17ページ）

り実質 GDP にもとづく購買力（購買力平価、または PPP）により測る。これら3つを合成した指標が HDI である。『人間開発報告』では毎年ひとつのテーマが掲げられる。例えば1994年版は「人間の安全保障」であり、95年版は「ジェンダーと人間開発」であった。そしてこのテーマと関連づけて、オリジナルHDI指標の細分化、バリエーション指標が次々と作成されている。例えば、94年版においては、国家内部の格差を、男女別、所得配分別、人種・民族別、地域別等によってみようと努力がなされているし、95年版においては、ジェンダーを切り口にさまざまな指標が出されている。

このように UNDP の人間開発指標は、生活の質の向上こそ開発のめざす目標であるとの思想を operationalize する、つまり現場で使えるものにする試みにおいて明らかに最先端を走っているもので、きわめて真摯な試みであることは確かである。しかし見方を変えれば、ひとつの限界を示しているとみることも可能である。その限界とは、ニーズ識別の主体は誰なのかという問題に行き着く。

J.フリードマンはニーズの概念には4つのタイプがあるとする[フリードマン、1995、108ページ]。それは、①欠乏としてのニーズ、②機能的関係としてのニーズ、③政治的要求としてのニーズ、④慣習的権利としてのニーズである。①は市場で得ることができないことからくる欠乏感をさす。②は官僚専門家によって認識されるものである。例えば「国民の教育水準を高めるために学校があといくつ必要である」といったものをさす。③は民衆、ないし市民によって認識されるもので、教育改善要求とか農業補助金への要求といったものである。④はすでに制度化されているものが、充たされないときにでてくるものである。そしてフリードマンは、官僚や専門家によるニーズの識別とその充足手段の探求、それにもとづく開発計画の立案プロセスを重視するというより、③の立場を重視するのである。つまり開発においては、当事者住民自身がニーズを表明し、それを実現していく政治的プロセスこそ重視すべきである。行政の役割は住民のこうした力を高め実践しやすい政策環境づくり（Enabling Environment という概念が使われている）の方が大切であるとするのである。この発想は近年、国際開発界で取り組まれている「参加型開発」の基本的な考え方でもあるが、この視点から HDI 作成の努力をみると、依然として「上からの開発計画づくり」というパラダイムの域から脱しきれていないように思われる¹²。

¹² もっとも、こうした参加型開発や Enabling Environment の概念をいち早く普及させているのは HDI の

そこで最後にマックス・ニーフの試みに言及して本稿を終えることにしたい。ニーフはさまざまな社会において市民を対象にワークショップを開催している。そこでは市民の参加者自らが自分たちの社会の充足手段とそれに対応する経済財を見つけ出すというプログラムが実践されている。つまり、ニーフの方法は、操作化の方法においてはHDIほど洗練されていないが、参加型開発の視点からすると実に実践的なものである。そしてこの作業の意味するところは、きわめて深い。というのもワークショップ参加者がじっくり時間をかけて自らの充足手段と経済財とはなにかを問うことから、自分たちの社会を覆っている商品が具体的にどの基本的ニーズの充足手段なのかを冷めた目で振り返ることになるからである。上にみたように財（経済財）とは本来、人間的ニーズを満たすための充足手段の機能を強めるものである。ところが現代の商品中心の社会では、手段である財そのものが目的に転化してしまっている傾向が顕著にみられる。これがいわゆるフェティシズム（商品物神化）であるが、ニーズ充足とはなにかを実践面で当事者（つまり私たち自身）自身で問い直すニーフの試みは、フェティシズムから自由になるひとつの試みとして評価できるのである。

むすびにかえて

哲学的な見方をとると、人間のニーズは身体的生存のニーズと精神的側面のニーズとでおよそ6つのニーズに括ることが可能であった。一方で、国際開発機関から出てきたベーシック・ヒューマン・ニーズの概念をみると、行政の立場にある者にとってのニーズ概念は、身体的生存のニーズ面に偏らざるをえないという点が明らかになった。しかし精神的側面のニーズを強調するなら、「操作化」は避けて通れない課題であった。さらに、あらゆる文化・社会を貫通する普遍的なニーズは存在しないというニーズ相対主義の考えもみた。

第2節では、80年代に入って出されたアマルティア・センの貧困概念を学んだ。それによると、貧困はケイパビリティの次元では絶対的概念になるが、特性とか財の次元では相対的な概念であるとする。すなわち、異なる文化・社会の発展（換言すれば「生活の質」の充足度）を比較できるのは、ケイパビリティの次元でしかできない。財や所得の多寡ではないということであった。

しかし、初期のセン理論にも限界があった。それはひと言で言うと操作化の面で不十分とい

UNDPである。国連機関の官僚の仕事と、地域住民の実践とを同一の土俵で論じることには無理があるという考えも成立する。

うことである。異なる文化のあいだでニーズの充足度合を比較して評価するためには、さらなる理論的考察が必要であった。セン理論をもとに、この課題に取り組んだのニーフとドヤル／ガフを第3節で扱った。前者は、文化に固有の充足手段と普遍的な基本的ニーズとのマトリックスを考案することで、ニーズの充足について説明しようとした。後者は、文化に固有の充足手段という考えに加えて、各社会が備えている前提条件の普遍性と「充足手段の特性=媒介ニーズの普遍性」という概念を考案し、異なる文化のあいだでニーズの充足度合を比較するという課題を前進させた。

第4節では、セン自身が中心となり操作化に取り組んだ成果である人間開発指標（HDI）について、その革新性をみた。この指標自体、細分化によって毎年さらに進化している。とはいえ、誰がニーズ策定の主役であるのかという点で、HDIも限界をもっていた。これに対してはニーフは各国で市民参加によるワークショップを開催し、各社会固有の充足手段とそれに付随する経済財の策定作業を、「市民主体」で実践していた。これはニーズ充足の「操作化」という課題において、ひとつのオルタナティブを提示しているといえよう。

<参考文献>

- Doyal/Gough(1991)A Theory of Human Needs, Macmillan.
- Iqbal Munawar(1985)Distributive Justice and Need Fulfilment in an Islamic Economy
- IUBS-CBE(1992)Basic Human Needs - An Interdisciplinary Peter Lang and International View
- Neef Max. M(1991)Human Scale Development, The Apex Press
- Ramsay M(1992)Human Needs and Market, Avebury
- Sen A(1989a)Hunger and Public Action, Oxford
- _____(1989b)Development as Capability Expansion inMacmillan Human Development and International Development Strategy for the 1990s
- Townsend P(1993)The International Analysis of Poverty, Harvester
- UNDP(1993)Human Development Report, Oxford
- _____(1994)同 94年版 日本語, 国際協力出版会
- _____(1995)同 95年版 日本語, 同
- エキンズ P(1987)生命系の経済学, 御茶ノ水書房
- 絵所 秀紀(1994)開発と援助ー南アジア・構造調整・貧困, 同文館
- 佐藤 仁(英文)(1993)Development, Culture and the Standard of Living, 国際協力推進協会

原 洋之介(1992)アジア経済論の構造—新古典派経済学を越えて—, リプロポート
フリードマン J (1995)市民・政府・NGO—力の剥奪からエンパワーメントへ, 新評論
山内 昶(1994)経済人類学への招待, ちくま新書

